

2023年1月29日（日）／説教者：國分美生

説教：「祈りは日々の生活の中から」

聖書：ルカによる福音書11：1～13

弟子たちは、祈りの仕方をイエスに請うています。そこでイエスが「祈るときにはこう言いなさい」と教えた祈りは、もともと彼らになじみのあったユダヤ教の伝統的な祈りとは全く違うものでした。祈りの出だしが「父よ」というのは当時のユダヤの習慣でいえば、言ってみれば非常に斬新であったというところに目を注ぎたいと思います。「私たちに必要な糧を今日与えてください」、「私たちの罪を赦してください、私たちも自分に負い目のある人を皆赦しますから」…短い素朴な祈りに彼ら信仰共同体にとって大事なことがギュッと詰められていたことがわかります。

5節以下、イエスは譬えを用いながら弟子たちに伝えます。譬えの中で、イエスは、友のために夜中にパンを求めて、相手に嫌な顔をされながらもあきらめない人の話をします。そこを読んだときに、私たちは、このイエスが教えた祈りが、個人の祈りではなく、私たち共同体の祈りであることにはっきり気づかされます。私たちが誰かと共に生きていくことを祈るとき、そして、そのために必要なことをひたすら共に祈り求める時、門は開かれる。願いは聞かれる、と聖書は言います。私たちは祈りを通して神の前に立たされ、また苦難の中にある人々の現実に関わっていくのです。私たちが毎月祈る「教会の約束」の「私たちは兄弟の愛をもって互いに慈しみ、互いに気を付け、常に喜ぶものと共に喜び、悲しむものとともに悲しみ、互いに重荷を担い合います」という祈りが思い出されます。そして私たちは本当にそれを心から、私たちの祈りとして祈り行動できているだろうかという問いかけがなされます。

私たちが互いに互いの命のために祈るとき、そこでイエス・キリストもともに祈ってくださいます。そして、たゆまず、求め続ける私たちの祈りに主は答えてくださいます。

わたしたちは様々な現実直面して、希望を捨て去らずに生きるということがこんなにも消耗するものだとは思わされています。そんな中で、そうであればあるほど、私たちは日々の中で、起きていても寝ている時でも、仕事をしている時も家事をしている時も、祈りで結ばれて生きていける共同体でありますようにと、祈らずにおれません。（國分美生）